

## 研究会報告

第76回 TCVC (Tokyo  
Cardiovascular Conference)

日 時 : 2023年5月20日(土)

午後2:00~

場 所 : ZoomでのWeb開催

当番世話人 : 厚生中央病院

五関 善成 先生

## 1. 腹痛で救急外来に受診し、原発性アルドステロン症と診断した一例

(厚生中央病院 循環器内科)

高橋 梨紗、加藤 浩太、小野 晴稔  
五関 善成

症例は40歳代の女性。主訴は突然の腹痛。会社の健診で数年前から軽度高血圧症を指摘されていたが、特に治療歴はなかった。2022年某日の夕方に自宅でシャワーを浴びている際に突然の腹痛を自覚した。様子を見ていたが、改善することなく当院へ救急搬送され、内科当直対応となった。来院時には腹痛のためにパニックになっており過換気症候群とテタニーを認めていた。血液検査ではK低値以外は特に異常値なく、腹部CTでも異常所見なしと判断した。その後、腹痛も軽快傾向であったために、帰宅となった。しかし、翌日放射線科の読影結果から前日の内科当直医が患者へ連絡し来院後、当科に対診依頼があり緊急入院した。入院後は血圧コントロールを開始し、ご本人の早期退院希望もあり入院5日目に退院となった。本症例において、腹痛の原因疾患加えてその原因につながる原発性アルドステロン症も疑われたため、後日精査目的に東京医科大学病院内分泌内科に紹介する方針となった。今回の症例において腹痛の際に鑑別すべき比較的珍しい疾患を経験したので、文献を参考に考察したいと思う。

## 2. アスピリン内服前に施行した上部消化管内視鏡検査で早期胃がんが発見された症例

(東京医科大学茨城医療センター 循環器内科)

葛西 星慶、東谷 迪昭、小松 靖  
大越 聡子、笠巻 凌太、岡野 紘之  
落合 徹也、田谷 侑司、阿部 憲弘

症例は68歳男性。腰部脊柱管狭窄症の術前評価目的に当

科を初診。運動耐容能を4 Mets以上認めたがBNPが256 pg/mlと高値を示した。手術は無事に終了し、術後2ヶ月で当科を再診し冠動脈CTを施行したところ左前下行枝に中等度狭窄を認めた。負荷心筋シンチグラフィーで有意な心筋虚血は認めず内服治療の方針とした。低用量アスピリンの内服が検討されたが、60歳時に十二指腸潰瘍の既往を認めため、上部消化管内視鏡検査を施行する方針とした。上部消化管内視鏡検査では、萎縮性胃炎と早期胃がんが発見され内服治療開始とともに内視鏡的切除術が施行された。日本で行われた大規模な低用量アスピリンを内服している患者に対する上部消化管内視鏡検査で粘膜障害を評価したMAGIC研究が2014年に報告された。同研究では、約1/3にびらんや潰瘍などの粘膜障害を認め、また2.5%に胃癌を認めたと報告している。我々循環器内科医が使用することが多い低用量アスピリンを内服する際には、出血性潰瘍を来す高危険患者群を適切に選択し上部消化管内視鏡検査を事前に施行することも検討されるべきである。貴重な症例と考えここに報告する。

## 3. 川崎病早期診断例における免疫グロブリン静注療法のタイミングに関する検討

(東京医科大学 小児科・思春期科学分野)

長谷川里奈、呉 宗憲、大野 幸子  
鈴木 慎二、石井 宏樹、山崎 崇志  
柏木 保代、山中 岳

川崎病(KD)は乳幼児に好発する系統的血管炎症候群の一種であり、臨床症状を中心に診断される。冠動脈瘤(CAA)の発生抑制を目標とした急性期治療は、免疫グロブリン静注(IVIG)療法を中心に確立され、汎動脈炎に至る前での投与が望ましいと考えられている。2019年に「5日以上続く発熱」が診断基準から外れ早期診断が可能となった一方で、その際のIVIG療法の至適タイミングについての指針はなく、早期IVIG療法に否定的な報告もあるため臨床現場で混乱が生じている。今回我々は、至適タイミングを見出すための研究計画への展開を想定した予備調査として、過去に当科でIVIG療法を行ったKD早期診断例のカルテを用いて、早期投与群(診断から24時間未満かつ第5病日未満)と待機投与群(診断から24時間以降かつ第5病日以降)の治療前後のIL-6、CAA発生率などにおける差異について調査したため報告する。